

フレーベルの人間教育の一考察 (四)

野 崎 信 洋

一 はじめに

フレーベルの学問的な思想内容と、その根本理念は、フレーベル独特な浪漫主義的精神の躍動する中に、宗教を根拠とした哲学意識に立って行われたものといわれている。そもそも、フレーベルの活躍した時代（一八〇八年頃）は、一般的には、ドイツの教育論は、教育上の諸原理を、宗教や哲学を根本原理に結びつけて考えるのが、一つの傾向でもあった。そこで、フレーベルが、深く思考してやまなかつたその思想と、「学問の実践的な結果は、その著「人間の教育」（一八二六年四四歳頃）に、一つの典型ともいべき充実した思想が展開されていることは周知の通りである。特に、フレーベルは教育理念として、常に主唱してきた問題の中心は、それは、なんといいっても、神と、自然と、そして、人間との関係を一体とした因果性の中に、これを理論的に体系づけをして述べている。

さて、私は、先に、本学の研究紀要に、「フレーベルの人間教育の一考察」として、二、三の思想に触れて見たが、このたび、フレーベルの「人間の教育」について「言語観」と「球の法則」を考察して見ることにした。私は、フレーベルの学問的な思想内容を一挙に、その内容を理解し消化することは、勿論、極めて至難ではあるが、「人間の教育」に、言語とは何であるか、という命題に立ったフレーベルの思想を探るに当たり、私は先ず、ドイツやフランスでは、幼、少時に於ける自国語の訓練は、日常の家庭生活において、極めてきびしい中に学習させ、そして、一たび自国語の美しい言葉習慣を身につけることによって、始めて立派な一個の社会人となる、という風習が常識となって言語の教育がなされていたといわれる。そこで私は、フレーベルの幼少の頃の家庭にて言葉のしつけはどのような習慣であったのか、という関心をもったのである。然し、今から約二〇〇年（一七八二年誕生）以前のドイツでは、自国語の実際指導の具体的な面に触れ、更に、言語過程の学習と、フレーベルの思考する言語観としての学問と実際の理解をえたいものと思ったのである。ところが、「人間の教育」上巻に言語、言語教育、お

よびそれに関連した読み、書き、下巻に、詩および唱歌の学習、言葉練習、お話し、発音の練習等が挙げられ、抽象的には、家庭教育の重要性や、人間教育の重要性を説き、このところでは、日常の人間形成に必要な欠くことのできない、といった言葉の実際指導例については、必らずしも詳細に述べてはいない。ただ、「言葉の成素は、何らかの意味をうちに含んだもので、それらが必然的合法的に整合して言葉が造られる。そして、畢竟すべての事件、事物、性質、関係などは一の概念的全体と見るのであるが、それもかの共働的に親密に相合して、言葉を造り上げるところの共働的原理即ち諸成素が幾つか結合して出来た産物なのである。」と云って、更に、単語の一つ一つの音についても研究を進めている。そこで、私は、言葉の運び方、センテンスの一、二の言語指導についての具体例を後述して参考としたい。

さて、そこで、フレーベルの言語観については、多くの学者も指摘しているように、純粹な哲学的言語観としてでもなく、或は、言語学としての音声や音韻の学問でもなく、それはやはり、フレーベル独特な觀念論的宗教思想を基盤とした言語観であるということである。

そこで、国語教育の立場に立った言語とは何ぞや、ということを述べているものではない。

それは、人間の教育に於いて、思考せねばならぬ言語の真髄はこうあるべきだ、という一つのフレーベルとしての宗教的言語観に立脚した言語についての考えであると思うのである。私は、かつて述べたように、フレーベルは、人間形成の教育的な場としては、勿論、家庭である、その

家庭のことについて、「家庭こそ、根源的な社会であり、教育の眞の担い手であった。地域社会、国家、人類等の教育の成否は一切、家庭教育の如何に左右される。幼児、児童の教育は、本来、家庭の母親たちの任務であり、女性としての彼女らの使命である。」と或は、「幼児は、家庭のなかで成長する。幼児が、少年や生徒に生い育ってゆくのは、家庭においてである。したがって、学校は、家庭に結びつかなければならぬ。」といい、「家庭と学校の生活の結合は、この時期の完成された人間の発達や人間形成の、またわれわれを完成に導くべきこの時期の人間の発達や形成はどうしても欠くことのできない要請である。」と述べて、生命を意識する家族や世代から自己自身を発展し続けねばならない、とこのように述べて、人間形成上必要と考えられる言語を含んでの習慣形成は、先ず、家庭にて行わるべきものとして、家庭教育存在の重要な意義を常に強調しているのである。

二、人間教育としての「言語観」について

さて、言語という人間本来的な表象行為について、フレーベルは、先ず、次のように、「自然」との話のコミュニケーションを採ろうとしている。それは、「神の存在を認め、そして、「自然」が静かに発する声を聞くこと、即ち、「自然のものいわぬ中に、静かに人間に物語っている。」と、いって、更に「自然を認識せよ、自然は人間に語りかけるこ

とを静かに考えねばならない。自然は、かすかに、非常にかすかに語りかける」のであるというのである。言語は先ず聞くことから始まるということ、しかも、自然の声を静かに聞けというのであろう。「未発達の感覚の人間でなお練磨されていない耳は、生命や自然の言葉や音声の練習は外界、特に、自然の考察から出発するものとして、対象の活動や作用及び、対象の現われた姿や印象の把握と直観において、また言葉によるそれらしい的確な表示において確実に自然の考察に帰ってゆく」と、このように外界即ち自然と人間との関係を極めて重視しながら、人間の言語観をうち立てようとしたのではないか。自然には、神の心が充満しているというのであって、「先ず、自然をみつめよ、自然は人間を育成する学校のような大きな一つの有機体である」このようにフレーベルは基本的な考えとして、自然創造説の認識に立って考える考え方は、独りフレーベルのみでなく、殆ど時代を同じくしているシュリングも（一七七五年—一八五四年）「自然全体が一つの巨大な動物となり、一つの大きな生きた身体となる。自然自体は徹頭徹尾生命なのである。」これは、かつてのいわゆる「狭義の自然哲学のたった道である」として、同一哲学のシュリングも万有在神論者として、「客観的世界の中の自我を見出し、自然の中に精神を見え出し、そして自然は見える精神、精神は見えざる自然でなければならぬ」と、いう内容の位置づけをして、自然という生命を捉えながら、自然尊重の人間主義を樹立しようとして止まなかったであろう。彼らは自然は神が形を変えた多様性の精神をもった生命の原動力であるとして、このように内的なものを自然に求め、言語

そのものも自然の発露であり、内言を自然の心として捉え、言語は常に純粹に自然的精神の産物として捉えたのであろう。フレーベルは「言語に靈性が現われている。」と見たのであるがこれは無論、基督教的な考え方であって、とにかく、生命を生産する神的な自然は、人間の内的な生命の源泉であるとして「生命は精神から溢れるものだから、親も教師も、幼児、児童たちの内的生命を尊重し豊かに育てなければならぬ」といい、自然と生命の一体観を忘れてはならないこと教えている。そこで、私たち人間の日常言語生活において、話しことばの音声言語にしても、書きことばの文字言語にしても、自然の精神から流露する言語であるという風に考えるならば、そこに自然即生命の躍動となるであろう。「われわれが、人生において、言語が宗教や自然なしに、また宗教が言語や自然なしに、或は自然学が言語学や宗教なしに、形成や発展の完成段階に到達することができるとおもふようなことは悲しむべきこと」であるというのである。われわれは日常生活において、言語の無意識化や、無感覚や、放談虚言の無節操な言語生活に終始していることに目覚むることがある。遺教経に「汝等若し種々戲論せば其の心則ち乱る。第一口を守る、第二心を撰む、第三暫恥を知る、第四堪忍す、第五常に独処す、第六食を節す。」とあって戲論を戒めている。どこか相通ずる宗教意識の言語観が漲っているという風に思うのである。

さて、このように、フレーベルの自然と人間言語を考えるに、ここで、西尾実博士の「言語生活の探求」の一文である正法眼蔵愛語を引用して見たい。即ち、博士の正法眼蔵四撰法の中の何をいかに活かすかとい

う語を極めてその意義を強調しておる。「愛語は身をもって、最も高い人間理想を実現しようとする向上的人間の實習すべき実行個条であり、社会改革の要目である。布施、愛語、修行、同時の四項である。」と、更に、愛語は、「衆生をみるに、まづ慈愛の心を起し、顧愛の言語をほどこすなり。」愛語が布施実現の一環としての言語であるならば、利行は布施実施実現の一環としての行動である。と、いってよいだろう……」と、自他一体境に立つことであって……、道元禪師（一二〇〇年—一二五三年）のいう愛語は、利行と相俟って布施実現の一環で、「同時」を立場として可能にせられる活動なのである。と、更に、「愛語は愛心よりおこる。愛は慈心を種子とせり」と、「むかひて愛語を聞くは、おもてを喜ばしめ、心をたのしくす、むかはずして愛語を聞くは、肝に銘じ、魂に銘ず」というような深く大きな作用をもたらすのである。のみならず、愛語は、「愛語を好むよりは、ようやく愛語を増長するなり。しかあれば、日ごろ知られず、見えざる愛語も現前するなり」というような創造話をいとなみ、「愛語よく廻天の力あることを学すべきなり」と述べられ、古今独歩の立言であり、七百年前における道元禪師の立言として今にいたっているだけで、われわれの生活の事実にならず、われわれの社会の形成力になり得ていなかったところに、われわれの伝統の無力さを反省せられなくてはならぬものがある。」更に、ことばを次いで、「道元禪師の愛語説は、何よりも宗教的真理の闡明であることはいうまでもない。しかし、それは、いわゆる言霊思想の継承や発展ではない。そこには、新しい言語機能の観察があり、言語構造の分析が始めら

れていることが注目される。」と以上西尾博士は道元禪師の「愛語観」を捉え、言語生活の認識を以上のように詳述されている。このように言語学者の言語を思慮される段に、その奥底には深い味のある捉え方をしているのであって、道元禪師の宗教観とは著しい相違のあるフレイベルの思想ではあるが、人間の口が表現する言語行為には偽はなしという意を表わした「信」にも相通する言語は自性清浄心の風に捉えて見ると、どこか共通にして、二面一体的な感覚として受けとめて見たいのである。さて東洋的な自然観と西洋的な自然観とのその思惟方法とは著しく相違するであろうが、勿論絶対的自然観と相対的自然観とを考えたとき、東洋的な自然観としてはその自然の中に心があって、例えばこれを文学として捉えた時は、文字をもって作者の心と一体となって描写され、或は、鑑賞者の精神を動かして「形象は意識における内面的統一」として、真理発展に創造を加えるものともなるであろう。

閑けさやいかにしみる蟬の声、即ち、詩神が作者にうつった時、素張らしい作品としての叙情詩となるであろう。フレイベルのことばでいうならば、「自然は、目には見えぬ人間の心に、かすかに、かすかに言葉が発している」というのであるが、西尾博士は、「幼、少年期のことばの中に詩の芽生えが見え出される……対話の相手は、恋人とか、母親とかいうような親愛な人間に、或は、山や木とか、鳥とかいうような自然観察から、人工物にまで、その真実を通じあわうとするところに、独自の表現が成り立っている」と述べている。

フレイベルは、「言語は、人間及び自然―したがって、神の精神の表現

であるから、言語からまた自然及び人間の知識、したがって神の啓示があらわれてくる」と言語は飽くまでも神の精神の表現に外ならぬのである。人間の面から見れば、それは、「それ自体人間精神の自覚の表現であるから、だから、言語は必然的に自覚的な人間の本質と不可分一体のもの」である。このように一語一語の内面的な言語精神があり、自然の発する言語行為そのものであるというのである。更に、重ねて、フレーベルの宗教観は、「宗教の教えるところは、自然が教える。神に関する考察は自然が実証している。宗教の要求は自然が成就している。自然は神の顕現である。一切の存在物は神の啓示であり、基礎的内面性をもって顕現して」いるというのである。そこには基督教的な差別観に立っていることはあきらかであるが「自然は力の本質、力の活動の原因、活動そのものを現わそうとしている。宗教は統一を求める人間心情の要求が主として現われる。言語は生命を純粹に一つの全体として顕示しよう」とつとめる。あらゆる事物の内面的な生きた連関の実現をはかることであって、理性を本とした努力以上のように「自然を精神とした精神創造説のようにフレーベルは、言語の問題をまたこのように表現するのである。

さて、前述したように、人間は本質的には言語をもっている動物であって、この本質的にもっている人間としての言語学を各学者は、各部の方面からそれぞれ研究を進めんとして、或る場合は言語の本質を文化史的に捉え、そして、これを言語の哲学性、宗教性、或は文学性をもったものとして、幾多の専門分野によって掘り下げられ、言語文化の発展と

なってゆくこととなっているのではあるまいか。

さて、このようにいろいろと言語観を思惟してみると、言語と人間、人間と生命、生命と自然、或は自然と言語といういくつかの命題が起ってくるのであろう。では、一体われわれは言語を始め、生命をうるためには、生命は言語なり、という風に考えてみると、その生命をうるためにはどうすればよいか、ということになろう。エミールに、「生きることは学ぶことだ、生れて生きはじめるとは学びはじめること、甲は甲の人間として学び始める。―養うことはしつけること、教えることである。―植物は栽培、人間は教育、―生れると産衣にくるまる。死ぬると棺桶にいれられる」ということは、生命をえるためには、生きなければならぬ。と考へねばならぬので、私は、極言例を参考にしたが、生きぬくためには、自己の生命をどのように内面化し、客観的な自己を掘り下げねばならないことか、言語をどのように、に思考すべきか、生命は一秒なりと、一瞬なりと、いや一殺那なりと、どこかに留まっているのである。うか、それともどこかに存在しないのであろうかと、考へ及ぶのである。そこで、フレーベルは、(一七八二年―一八五二年)七〇歳の生涯を閉じたが、フレーベルの人生の生ざまを眺める時、家庭的には不遇で、戦争にも参加し、国家的にも至極混乱の時代でもあった。フレーベルは人間的な辛酸をなめつつ研鑽し続け、そして、人間の教育に専心したのであった。私は、フレーベルの文献を繙くに当り、彼の生涯を頭に描きながら、更に、フレーベルの言語観を追求してみたい。「内なるもの、精神の活動がつねに外なるもの、自然と結びつくことにおいてのみ可能

であるとすれば、根源的生命から流出したそれぞれの個別的存在は、それぞれに固有な自然の形態をとって現われ、そのなかで根源的生命を分有することになると」、このような自然観に立って、人間生命を繰り返して思考しているのであって、宗教、自然、言語は内面的な交互作用をもち、そこには一つの統一性、個性そして多様性をもって一つの純粹な一者として見ているのである。この一者的思考は、他の宗教にも相通する思惟でもあろうがそれはともかく、これが日頃のフレーベルの根本思想の特色であろう。宗教、自然、そして言語は三位一体として、それ自身分けることが出来ないものである。

そこで、再び道元禪師の宗教観に触れて見たい。無論、根本的には教理上からも、思想上からも相違するであろうが、どこか相通する宗教観、自然観が思惟されてならないのであって、道元禪師は、自然と人間とは一体であり、自然が仏そのものであり、人間そのものである。フレーベルのように、まず、神の存在を絶対者として立てている。しかも常に相対的主観に立っているので、ここが大きな争点となるであろう。フレーベルは精神創造者ともいうのであろうが、最も自然哲学では、生命の問題としてはカント（一七二四—一八〇四年）のように方向づけられた自然と神とを区別して考えられてもいるのだが、このあたりは大きな問題となっているのであろう。とにかく、道元禪師の正法眼蔵即心是仏に「正伝しきたれる心というは一心一切法一切法一心なり、心とは山河大地なり、日月星辰なり、青黄赤白これ心なり、年月日時これ心なり、夢幻空華これ心なり、一切諸法森羅万象ともにただこれ心にしてこ

めずかねざることなし」と説かれ、天地一切そのものが心の表現である。「万法即心なり、三界唯心なり、唯心これ唯心なり」と語を重ねて懇切に、その内容の工夫に理解を与えられたものと考えられる。「三界唯心は全如來の全現成なり云云」と示され、自然の森羅万象、自己自身これ表裏一体の宗教観に立たれた「山河大地をひとしきわが生なり」或は「春華秋月これ心なり」という風に自然と自己の一枚たることの覚醒の宗教観に立たれた真の意味を表現されたのかも知れない。ところがあらゆる事物の内面的な生きた連関の実現をはかることであって、理性を根本とした努力以上のように自然を精神とした精神創造説の思考者フレーベルは、言語の問題をまたこのように表現するのである。

フレーベルは、言語の問題を考えるに、直接宗教、自然、そして言語を考えるという順序をもっているので、その三者いずれを欠いても、のことは直前にも述べたが、特に、宗教心の培いを精神の中に迷わず持ちつづけている統一性の実現をめざしているということが重要なことであろう。ところがまたフレーベルは自然観を考えるにあたって、基本的な思想の一つとしてここに数学という異質のように考えられる問題を考えている。即ち、力の本質、力の作用の根拠を知らせようとするもので、自然の観察や、認識を媒介とするのは数学である。という概念に立った時、そこには確実性を求める、合理性とか、科学性とかいうものが考えの要素になるので、自然現象は真善美の実相を息づいているその摂理的な自然自らの姿を捉えようとして、このような思考におよんでいるのではないだろうか。

さて、フレーベルの自然観や言語観を考えてきたのであるが、更に言語とは、人間の心の中にもっている理性的な多様性をどのように統一する力を發揮し、精神的欲求を充足せねばならないか、人間の内面に常に發展しようとする心の動きをどのように表現するかを考えて、言語を一つの全体としての生命の啓示を試みているのである。フレーベルは自己の内なるものを外なるものにおいて、自発的に表示したものが、「言語」とよばれる「話す」という語である。そこで話すという行為は、「いわば自己自身をひきさくこと、自己自身の中で分節すること、自己を分離し、分割すること」である。言語を語る人は、自己の内面、自発的に外に表わすのである。内面的なものは常に働いている。即ち、生きているのである。これが生命である。言語は常に「人間の本質や内面と結びつきながら、人間を表現するものである。言語は、人間それ自体の全体である。全体の中に自然現象も自然の本質も内在しているというのである。又、言語は、「人間の内的な世界と外的な世界全体の模写である」とい、更に言語は法則や合法性を自己自身の中に、自己自身を通して表現されており、必然的な合法則性の表現でなければならない。」これは、先き程もちょっとふれたが、言語というものは必ず一定の法則性や秩序があるというのであって、ピアジェも、幼児のことばを意義づけて、「言語は構成された構造を体制として持っている」と、形の上の文典的な捉え方ではあるが、ことばの合法則性の中に、有機的な言語現象が展開されていることを証明しているものであろう。前述したように言語は「人間の精神から直接に生じてくるものであり、人間の精神の表出ない

し表現である。」即ち、精神の純粹な所産だといっている。「自然の精神とは、それ自体一つの精神、自然と人間とは一つの根拠であり、源泉である。「言語は、語の究極的な構成要素、つまり母音や子音や閉塞音及びそれを表わす字母において、単に自然の普遍的な基本関係や基本性質だけでなく、精神的なものの作用や表示をも必然的に表現する」というのである。言葉の本質としての言語観は、「教育や教授の目的のために、更に、全面的に基礎づけられて展開され」ることであると、考えられている。なお、言語学的な問題、即ち、方言の正しい評価や方言相互の認識や、ドイツ語、ギリシヤ語、ラテン語の母音の問題等についても研究を進めているフレーベルの思惟については後日触れて見たいと思う。

以上、フレーベルの人間教育の重要な内容として展開されている一面の哲学的言語思考の問題点は、それは常に生命を把握することにあり、これを人間教育のどこで、どのような形で捉えようとするかの志向がそのねないであったと考えられるので、宗教と人間と言語という問題を軸とした自然哲学の認識的思考の掘り下げ方としては、已に中世の頃から、学問の本質的なものとしての根本は神学であり、従って神を出発とした。そして、神学の精神状態から近代の諸科学が出現した、といわれるように、歴史的な流れの中にその発展の大小が現われたにせよ、神学的世界観や神的宇宙観を基本観念として、フレーベルの学的なものも確立して行ったものと考えられる。大橋博司博士訳(ヴァイツェッカー)（一八八六―一九五七年）の「自然、神、人間」にヴァイツェッカーのこと

ばとして「神は創り、神は語り、神は分ちたまいました。」と神は世界創造主として認識している点を忘れることは出来ない。——神による創造と神によらざる生産との特性のあることも意を払わざるをえない。として例えば、遊星の軌道説を述べているが、これは私のこの度の考察の対象ではない。

さて、フレーベルの、本質的な言語観はどこまでも精神主義的思考に立っての学問であるので、多くの学者が理解し憎いといわれるゆえんでもある。然し、一面、「言葉を教える際に、われわれが悉くこどもたちのために、個々の語を事態や事物そのものの現実的直観に、もっと結びつけてやるようにするならば、われわれ自身特にこどもたちは、言語に關して遙かに根本的な洞察をうるようになるだろう、子音や母音の全体ないし単語の全体でなくて、現実の事態や生命の全体であらうし、事態を深く直観し認識するようになる。その時こそ生命のこもった真の言語となる」と、このように言語の本質的な考えとして述べている。更に「言語は表現であり、運動であって、幼少年期の全人類に生き生きとして知覚できるものとして現われてくる。青少年に言語の内面的生命を目醒めさせてやらねばならぬ。それは彼らの心の中に生きさせること、邪魔ものが襲ってくるかも知れぬ、ところが、粗野な生命のない冷いことばによって芽生えつつある生命を殺している。われわれが、おいで坊やごらん、すみれさんよ、とつてもきれいでしょう——摘んで水にさしてごらん。気をつけるんですよ。なくしたらほんとに惜しいものね」などという時がそうなのである。

もしわれわれが子どもに、「ああ、お出で、さあごらん、にこにこ顔の堇ちゃんよ、と語りかけ、次に、にこにこ顔の堇ちゃん、あなたを見ていると、わたしはどうしてこんなにしたのしいの」という風に、子どもが堇を見て抱く感情に、何らかのことばを与えるようにすれば、この堇の觀察が、その子どもの心情に与える影響や結果は、どんなに異ってくるか」このようにやさしくあたたかい言語の具体的指導がなされなかったならば、内的生命の成長をとまらせてしまうことになる。「幼児の成長は大人と同様に宗教や自然や言語を通じてあらゆる生命の中心に立って生きているのである。自分の子どもたちや教え子たちの内面的生命をできる限り豊かなものにする。そして溢れた活動という点を両親も教師も是非心がけ配慮しなくてはならぬ」。というのである。

「幼児、児童という存在は、将来に向けて、人類史的にもいろいろな面に活動しようとする幾多の人材が輩出することになるので、子どもたちの要求を眠らせたままにしないように、こどもの存在を抹殺しないようにすることはやがて、学校が栄え人類が発展するだろう」と予言しているのだ。フレーベルは、更に「言語の生きた認識を思考し、自己を高め、自己の使命の達成に近づいてゆく、この行為によって、はじめて人間は人格になる。書くこと、読むこと、学習しようとする努力こそ、幼児たらしめ、生徒たらしめようとするものである。努力のもつ高い、最も高い価値の展開がなされてくる。人間の真の自己の使命に、自己の生命に到達するのであろう」と、このように、全人類の自己形成に心をそそいで、自己を創り出してゆかねばならぬ、と、人間的内省を慮って

るフレーベルの教育的な真摯の態度が想察されるのである。

三、人間教育における「球の法則」について

フレーベルは、教育の根本的な統一的原理を内包している本質を究めようとして、まず、宇宙に「形」のあることを認識した。この「形」こそあらゆるものの力をこめた、根本的な存在とした。そもそも、この宇宙の森羅万象無限に多くの「形」が存在している。その本質的な宇宙の真理を究めようと、物理学や、化学や自然哲学の学問に対する蘊奥を一層掘り下げたものと考えられる。フレーベルは「どんな形の認識も、結局は、つねに、線的なものの認識を基礎にして、特に、もろもろの形は、直線的なものの媒介を通して、直視され、認識される」という思考の立場に立って、「形」の哲学を産み出したものであろう。フレーベルは、ここに興味深い学説を唱え、「それ自身において、容易に動き易いものであるという物質の性質の根拠は、質料に内在している力の根源的に球状になろうとする傾向であり、一点からであらゆる方向に向って、一様に働きながら、自動的に、自己を展開し、表現しようとする」といい「あらゆる方向に向って、自己を表現するならば、その空間的な現われ、ないし物体的な産物は、球である」というのである。丸い立体的な形態が、自然の全体を貫いているというのであって、そして、その球こそ最も普遍的な、最初の、そしてまた最後の自然形である、というの

である。フレーベルは、自然形即ち球形に関して、いろいろと直観し認識を企てている。その思想の一つの具現化として思惟したのが恩物即ち教育玩具ではなかったか。今述べたように、まるく立体的なものボールであり、球である。そして、単純なものの中に最も高度の多様性を含んだもの、即ち、宇宙創造の原形的なものとして創造したのではなかったかと考えられる。そこで「球の法則」が生み出されたものと思う。そこで、先き程の恩物の原理も学問的であり、単なる遊戯的ではなく、極めて宗教的、哲学的な意義をもたせながらこれを研究したものであろう。即ち、恩物は第一恩物から第二十恩物まで、それぞれ作用、性格、千差万別の形態をなしている。この恩物に関して、多くの学者も創始者フレーベルに対して偉大なる達見として称賛している。ところが、この恩物には物理的的教学的な思考と洞察力を与え、幼児、児童に多様なそして雑多における統一の原理を理解させようとしているのである。そのように、数学的な性格をもたせながら、更に、この教育玩具としての恩物そのものには極めて深い宗教性を感得させる中に、神の心を認識させようとするところに重要な内容がある。

さて、前述の第一恩物は六色のボールから成っており、幼児、児童が掌握のできる小型の六個である。このことは本学紀要創刊号に少しふれてみたが「万物は単一なる法則に従ってボールから必然的に発展することが出来る。ボールの形態は普遍であって特殊であり、全体であって个体であり、統一であって部分である。而もそれは無限に自己発展する。然るに万物もすべてこのボールのような性質をもっている。」と定義す

けている。第二恩物は、球形、円筒形、正方形の三種である。第三恩物以下はこのたびの研究の対象としないので省略するが、幼児、児童は自身の発達につれてボール以外の遊具を要求する。そこで一段進歩したものととして第二以下の恩物を創造したのであろう。フレーベルは「球は一個の表面即ち唯一の曲面を有するだけで、そこには隅若しくは角とか稜とかいうものはない。従って一段進歩したものは平面と稜と角とをもつものでなくてはならない。球は直角に交わる三つの中軸をもっている」と説明を加えて球の発展する多様性の表現を定義づけている。そこで考えられることは数ある恩物の中で、「ボール」と「球」とはその最高位としたゆいんは、重要な意義と価値を具えているものとして考えたのであろう。

さて、何故に、球形が宇宙の重要な存在価値をもっているのかを再び考えて見よう。即ち、球形こそ、原始形であり、基本的でもあって、日月星辰、天体を始め水、液体、気体、埃すべて球形と見るのであって、点、線、平面側以上のものは一つもない。然し、凡て点線平面側面そのものである、と考えるのである。更に、球形の表面は悉く自然物の形状であって基本的条件を自己の中に具えている。この中から一切の形状が作り出されている。ボール自身の一個の全体が完結せる統一体である。魅力ある自己を形成し、自己を発展させるものであり、幼年時代におけるボールは自己と対立せる同一物として最も重要な遊具である。球は凡ての形態の保持者であり、万物は単一なる法則に従って必然的に発展することが出来るというのである。球は全体であり、個体であり、統一で

あり、部分である。つまり、普遍は特殊を造り出すという法則である。そして、無限に自己を發展させる人間の本来の本質のみならず、事物の本質をも体験し、把握し、これを更に究めることの本来の面目を掘り下げ、創造活動へと發展させようとしたのであろう。フレーベルの体験的なものと思索的なものと、内なる生命としてまとめようとして考えたのがここに神、自然、人間についての基本観を「球の法則」として結晶させるにいたったのではないか。次にフレーベルはこう述べている。

1、永遠なるもの、根源的なものは、一なるも、自己と同一的なものである。それはいかなる差別もふくまないが、あらゆる存在を潜勢に含む絶対的中心で、数学の記号で表わせば点である。

2、あらゆる存在は、絶対的中心から現われてくるが、これは、無からの創造ではなく、根源的な力の流出としてである。この力は、あらゆる方向に一様に、したがって、球状にはたらく、また一つの方向にだけについて見れば、二つの対極、つまり、プラスにマイナスに分れるという形ではたらく、力の作用が有限な場合は、この分化は、中心から等距離の二点に二つの対極をつくる。

3、この二つの対極は、それぞれ絶対的中心における無差別なもの(統一のない統一)への解消を求める。始点ではたらく力の量が、不変なのだから、この二点が出合う点は、始点を中心とする円周上、しかも、もとの両極を結ぶ軸線に対し垂直をなす地点に限られる。こうして無限に可能な対極をとってゆくと、はじめに円形として展開された像が完全になる。球こそすべての対立を解消し、統一するものである。このよう

に球の法則を思考したフレーベルは、本来的かれの形面上学的な考えを数学的形式をかりて象徴的に表現されていると、評されるゆいである。フレーベルは人間教育の中に、「生命統一とか、神的統一」という文字を用いているが、それは自己の精神の中に存在する観念をまとめるとか、心を静かにして一点を思考するというのではなく、その中心的概念として合一、即ち「生命の合一」という語をもって表現しているであろう。これは、結局、現実の世界に存在するすべてのものは、有限であり、対立をふくんだ世界であるので、この現実の世界をこえた合一的なものは生命が基本法則でなければならぬ。と考えたのではないか、球には特殊性と個別性とを考え、「その特殊な中心のそれぞれの新しい出発点」である。そして、更に、「自己を分化し、自己を球として完成させる」ことよって、「新しい分岐となる」とともに、「一つの合体であり、自己を分化する無限に巨大な球の有機的全体が形成」されると、このように球の発展する姿を哲学的に捉え、あらゆる存在は、球的性質をもち、世界全体は球の法則に貫ぬかれている。「まるいもの」という一個の物体、或はまるく描いた形にしても、物理的な原理を含んでいて、そのものもっている形から考えられる無限な精神的内容を思惟した時、フレーベルのいう「自己を球として完成する使命を担っている」というこの意識的に自覚的に、この使命を果せることが、人間教育の原則である、というのである。球として完成する、これにはたしかに深く重要な意義をもっていると考えられる。

円相環ということばがあるが、これは、平面に描いた一つの形相であ

るが、「円なること大虚に同じ、欠くることなく、余すところなし」と、いって、真祖、法性、仏心、大道、至道等、法界に周徧して平等絶対なる的意を言句葛藤に依らず、学人をして直下領会せしめんがために云云」とあって、円満なる形から受ける人間の哲学思想や、宗教観に一つの相通する思想を感得して、これを、教育思想に、道徳思想に或は政治思想に及ぼす道理のあることを思うのである。フレーベルは、前述の球を自然形と考え、内容には力が充満し、普遍性より特殊性が生じて起り、普遍即特殊の理法もここより生ずることの理を重ねて思うのである。

さて、フレーベルは「自然界における事物は、地上に生きて盛んに活動しているに過ぎないように見えるが、その事物の根底には、球体のうちにある根本的法則が働いている」、というのである。地上の自然物の形は極めて多様で、個々相異つたものであるが、然し球状態は最も原本的な形体で地上の一切の自然形式を統一してその法則を内にふくんで現われている。としている。繰り返して述べてきたが、球状態は、無形状であるとともに、最も完全なる形体として見ているので、球の表面は悉く点であり、線であり、平面側面でもある。自然事物の球は、球の法に基いているとして考えている。「自然界における事物は、地上に生きて盛んに活動しているに過ぎないように見えるが、その事物の形体の根底には球体のうちにある根本的法則が働いている。即ち球の法則に基いている。」として思惟され球形的なものの法則の中に、その最初の根拠を持っている。というので球というものの物理的思考をその力の本質を内在して、物体的な産物として評価しているのである。私たちは、形の直観と認識

のために、しかもいろいろな形の結合を深く考察されなければならない。

四、結 び

以上、私は、フレーベルの人間教育における思想の一端を考察して見たが、なお、広汎且つ難解な学問である「人間の教育」には、宗教、哲学、教育、学校、家庭、物理学、化学、数学、芸術、言語、恩物等、或は、時間空間の諸問題の多くが述べられているので、結局、その中心的根本的思想は、人間の自我の発展から、自己を形成する道程において、どのように自他を哲学するか、生命のない知識に墮してゆくか、それともカントの言う「人間への自覚の哲学」とするか、生死事大無常迅速油断の許さない人生観人間観を黙考させられるようにとも考えられる。ただ、概念にとらわれて、抽象的な宗教観に陥って、その本源を忘却することであってはならぬことを工夫せねばならない。フレーベルの芸術観に次のことがある。「人間のあらゆる努力の目標とその中心点を究極の関係点について、少年の頃から、人間の生命を動かし、少年の生命活動に高い価値が展開するように努力することである。更に、第一のものは宗教の努力である。第二のものは、自然考察の努力であり、第三のものは、主として自己表現や自己発展や自己省察の努力である」と、努力、努力、更に努力であると言って、生命表現を繰り返し協調しているのである。私は、フレーベルの宗教と自然と言語との関係の一端と、球の法則

の一端との概論に触れて見たに過ぎないので、意をええないが、後日更に、この研究を続け、フレーベルの思想の真髄に触れて見たいと思う。最後に、この稿に際し、本学の太田教授、舟木助教授の暖いご指導を頂いたことを深謝して結びたい。

参 考 文 献

- 人間の教育（上、下 フレーベル著 荒井武次訳）
フレーベルの教育学（荘司雅子著）
神・自然・人間（ヴァイツェッカー著 大橋博司訳 みすず書房）
世界教育宝典フレーベルの教育（玉川大学版）
哲学的自然思想（遠山諦虔著 芦書房）
人間学（カント著 坂田徳男訳 岩波書店）
言語生活の探求（西尾 実著 岩波書店）
道元禅師聖訓（忽滑谷快天抄）